

福島県いわき市 「四倉児童クラブ」からの 報告

猪狩利江

四倉児童クラブ 指導員

いわき市は、福島県の東南部に位置し、阿武隈高地と太平洋に挟まれた地にあります。東北地方としては気候も温暖で、海のものも山のものも採れる住みやすい町でした。東西南北に広く、福島第一原子力発電所からの距離も、近い所では三〇キロメートル圏内に入り、遠い所では六〇キロメートル以上も距離があります。ですから、被災の状況は地域によってかなり異なります。

私の勤務する四倉児童クラブのある四倉町は、いわき市の北に位置し、港も海水浴場もマツタケの採れる山もあるところです。四倉児童クラブはもともと、四倉小学校に隣接する市立幼稚園の余裕教室で運営されてきました。震災当時、周囲には地震や津波で倒壊した家屋もありました。現在は、仮設住宅ができています。

* * *

子どもがいると、いっしょに泣きだす子どももいました。

* * *

今年度は、避難してきている子どもを五名、受け入れています。学童保育での生活の経験がある子どもは、戻りたいという話を時々していますが、保護者さんに聞くと、もう戻れないと決めている人がほとんどでした。帰れる状況だとしても、留守宅が盗みにあうなどして治安が悪く、子どもを連れてはなおのこと戻れないという考えもありました。

二〇一三年四月、教育委員会が「幼小連携」を打ちだし、幼稚園は小学校で半永久的に過ごすことが決まりました。同時に、児童クラブも小学校で生活することになりました。一つの施設を二つの団体が利用するというと理想的な形のように聞こえるかもしれませんが、児童クラブは居候の居候という

震災から三か月半ほどたったある日のこと、市の担当課である児童家庭課の方から、放射線量が高いので明日から開設場所を移してほしいとの話が突然ありました。私たち指導員はそれ以前から、「ここは大丈夫なのだろうか……」と内心、心配していました。園舎の北西が森林地帯になっており、やはり、その放射線量の影響が園舎や園庭にまでおよんでいたようです。

それからは、小学校の空いている教室（家庭科室・音楽室・PTA会議室など）・老人福祉センター・公民館と、曜日や時間によって場所を移動しての保育となりました。最初のうちは、「今日はどこ？」と子どもたちから尋ねられ、いつまでこの落ち着かない生活が続くのかと不安な毎日でしたが、子どもたちが元気でいてくれることが指導員の唯一のはげみでもありました。

二〇一二年四月、四倉小学校で授業

感がぬぐえませんが、「震災以前の生活にまだまだ戻っていない学童保育もあるなかで、居場所があるだけよし」とする考えには、なかなかありません。

* * *

これまで、全国からの支援もたくさんいただきました。感謝しても感謝しつくせません。今もなお、支援をつづけてくださっているところもあります。本当に人のつながりを感じた二年間でもありました。

いわきの子どもたち、福島の子どもたちに、「大人になっても戻ってくるよ」と言ってもらえるようないわきであり、福島であるためにも、指導員の果たせる役割を考えながら努力していきたいと思えます。

を行っていた四倉中学校（校舎が津波で被害を受けていた）がもとの校舎に戻れるようになったのと同時期に、「あくまでも、放射線量が下がれば、もとの幼稚園の余裕教室に戻る」という条件つきで、幼稚園といっしょに児童クラブも、小学校の教室で生活することになりました。この頃から、四倉児童クラブでは、原発周辺の町村から避難してきた子どもたちを受け入れるようにもなりました。

移動することなく、一か所での保育になりましたので、指導員の負担はだいぶ少なくなりました。子どもたちも、普段はなんでもなかったかのように過ごしていますが、ちよっと大きな地震が起きたり、津波注意報が出ると、パニックになる状況があります（このよなことは、とくに高学年の子どもたちに見られます）。震災当時のことを思い出してしまうのか……、泣きだす